

明倫短期大学研究会講演抄録

第43回：7月13日（木）

カウンセリングの実際 セクシャルハラスメントを中心に

下河辺 宏功 教授（歯科衛生士学科）

抄録は、『最近の歯科衛生』欄の「カウンセリングの実際 セクシャルハラスメントを中心に」に掲載されている。

第44回：7月27日（木）

失語症（者）リハビリテーション 臨床の治療構造論

鈴木 淳 講師（歯科衛生士学科
専攻科保健言語聴覚学専攻）

＜失語症の一般的定義＞、＜国際障害分類（WHO1980）にみる失語症の障害階層＞、＜人間にとって言語とは、そして言語を失う意味＞、＜失語者の発症前後の状況、社会構造、治療構造、患者自身の変化＞、＜失語者とのコミュニケーション＞等々についてビデオによる患者とのやり取りの実際の姿を示しながら、解説を加えた。

第45回：9月14日（木）

幼児の歯科診療における医療過誤防止

小野 博志 教授（歯科衛生士学科）

歯科医療自体が本来医療事故を起こしやすい医療行為である。加えて幼児は精神的にも肉体的にも未熟であるために、診療での対応の困難さ、診療結果の予後の不測性がある上に、保護者の介入を必要とすることから年長児以上に診療上事故や過誤を生じやすい。そこで、医療事故の実例を紹介するとともに、判例に基づいて暴れる幼児およびその保護者への対応法の在り方、さらに個々の事例についての医療事故防止対策を述べた。

第46回：9月28日（木）

歯科麻酔Q & A —新しい心肺蘇生を中心に—

宮本 智行 歯科医師（附属診療所）

麻酔科学は除痛法のみならず、幅広い基礎医学の基に「生命危機管理学、生体管理学」として発展してきている。今回は、本年8月に発表されたInternational

CPR and ECCGuidelines2000を中心に新しい心肺蘇生法について発表した。これは初の全世界統一のガイドラインであり、科学的かつEvidence Based Medicineに準拠したものである。心肺蘇生法の単純化や除細動器の早期使用推奨などが掲載され、それに説明を加えた。

ゼロ度 人工歯とその有用性

丸山 満 助手（歯科技工士学科
専攻科生体技工専攻）

総義歯に付与できる咬合様式として、ゼロ度人工歯を使用したフラットプレーンオクルージョンは、咬合力を下顎堤に垂直力として作用させ、ニュートラルゾーンを優先した人工歯の排列が可能なることから、義歯の安定化と舌房の確保、側方圧の軽減をもはかることが期待できる咬合様式であり、適応症例とその排列方法について報告した。

第47回：10月12日（木）

発音を利用した総義歯製作法

松本 直之 教授（歯科技工士学科）

義歯装着による発音障害の発生を防ぐためにも発音機構からみた歯の役割を理解する必要がある。一般に、言語音は調音方法と主たる調音部位との組み合わせによって分類される。そのため、義歯製作時、調音部位が歯または口蓋側歯槽部にある言語音を選んで発音させ、適切な調音関係になるように人工歯の排列位置や口蓋形態を形成してやれば発音しやすい義歯ができることになる。今回は、発音を利用した総義歯製作法と発音障害の検査法ならびに修正法について紹介した。

第48回：10月26日（木）

歯科医療コミュニケーション

山田 隆文 助教授（歯科衛生士学科）

医療従事者と患者との関わりは、歴史的にはパターンリズム、むんてら、インフォームド・コンセントと経てきた。最近では医療サービスという言葉も聞かれ、病気でありながらも人間らしい生活を行うクオリティ・オブ・ライフを得るために、患者をサポートしていくという立場に変化してきている。患者のニーズを正しく掴み取るには、歯科医療の分野においても、コミュニケーションのあり方が重要になってくる。